

長商新聞

長崎県長崎市泉町1125
市立長崎商業高等学校
新聞部
電話 095-887-1511

校訓

誠実
明朗
進取

～長崎の世界文化遺産を訪ねて～

「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」取材会に参加

7月15日(日)に長崎市在住の高校生を対象に、文化庁などが主催する「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」取材会が行われた。

この取材会は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた公認文化プログラムで、中学生・高校生がジャーナリストとして文化や歴史を取材し、発信する活動である。

6月30日(土)にバーレーンで開かれたユネスコ世界遺産委員会で「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の登録が決定された。



ド・ロ神父記念館取材の様子



大野教会堂取材の様子

潜伏キリシタン関連遺産のうち、長崎市の「大野集落、出津」について

集落、大浦天主堂を取材した。長崎カトリックセンターの方に取材方法などに関する講習を受けた後、バスで取材先へ。車中では、取材会のガイドを務めてくださる犬塚明子さん(61歳)が潜伏キリシタンについて説明してくださいました。



ピンバッジをつけて取材

浦上地区とキリスト教

取材会の出発地、長崎カトリックセンターは長崎市北部の浦上地区にあり、カトリックセンター隣には、レンガ造りのカトリック浦上教会(浦上天主堂)がある。この浦上地区には多くのキリスト教が暮らしていた。1614年に幕府がキリスト教を禁じる禁教令を出した後も、表面は仏教徒を装いながら、キリスト教を信仰する潜伏キリシタンが多く存在し、彼らが祈りをささげた教会も、外見は普通の民家でも中にはキリスト教の祭壇があるというものが多かったという。

現在でも浦上地区にはキリスト教に関連する史跡が数多くある。そのなかの1つ、大浦天主堂付近にあるサンタ・クララ記念碑は、かつて浦上にはサンタ・クララ教会という教会があった。当時、イスパニア(現スペイン)人の宣教師、アルウレス神父がいた浦上では、たった一つの教会だったが、禁教令が出され、教会は破壊されてしまった。信徒たちは教会も神父も失ってしまったが、教会で働いていた孫右衛門という人物が、潜伏キリシタンの組織を作り、信仰を続けていった。毎年夏、現在記念碑が建つサンタ・クララ教会跡地に集まり、盆踊りを装って祈りを唱えていたという。



サンタ・クララ記念碑

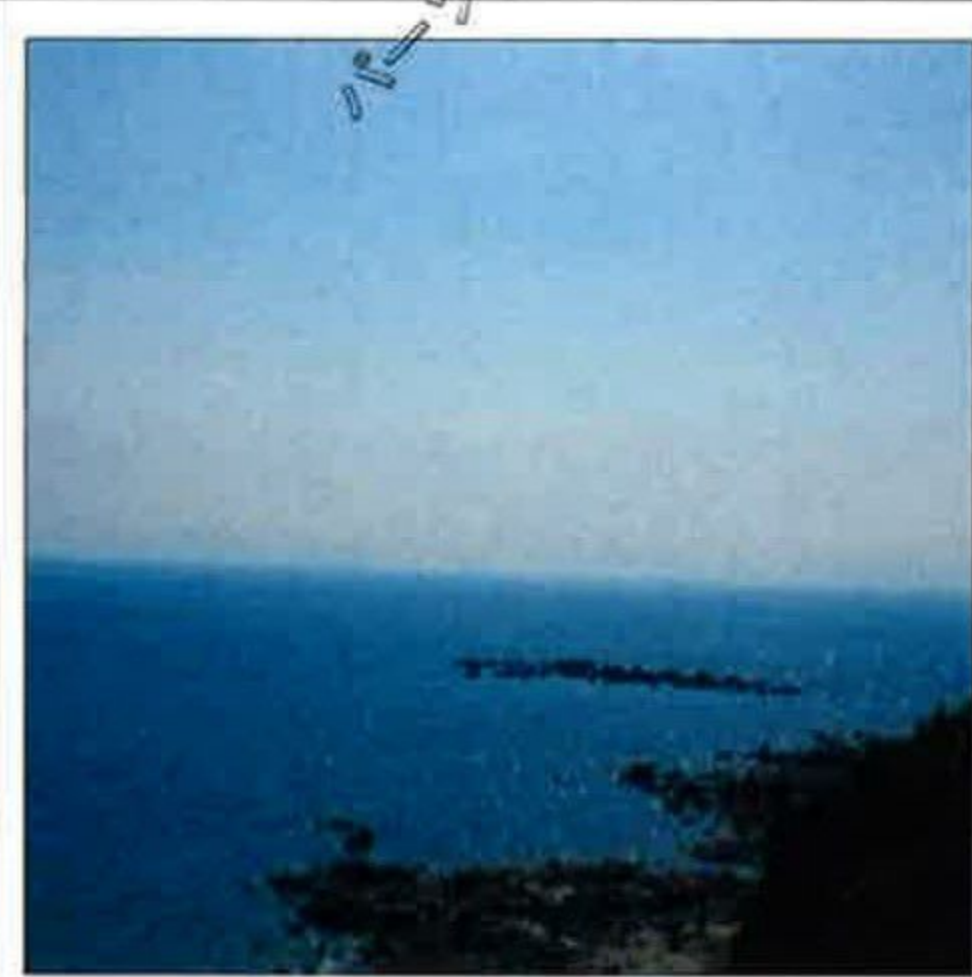
外海地域とキリスト教

長崎市西北部に位置する外海(そとめ)地域には、1571年にキリスト教が伝わった。外海には「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」を構成する12の遺産のうち2つ、大野集落と出津集落がある。この2つの集落の他にも、樫山地区にある「赤岳」という山も、潜伏キリシタンにとって大切な場所であった。赤岳は、黒崎地区と

浦上地区の潜伏キリシタンには聖地と言える場所があった。彼らにとっての聖地はイタリアのローマであるが、当時ローマに行くことは不可能であった。赤岳に3回登ればローマに1回行ったことにしていたという。しかし、浦上地区の潜伏キリシタンは樫山地区が幕府から支配されていたため、赤岳まで行くことができなかった。そこで、彼らは近くに

る岩屋山に3回登ると赤岳に1回登ったことにしていた。よって岩屋山に9回登るとローマに1回行ったということになる。

このようにして黒崎地区と浦上地区の潜伏キリシタンたちは、ローマを思いながらキリスト教の信仰を続けたのである。



外海から東シナ海を臨む

大野集落と大野教会堂



世界文化遺産「大野集落」にある大野教会堂

大野集落の潜伏キリシタンは、表向きは仏教寺院に所属し、集落内の神社の氏子として

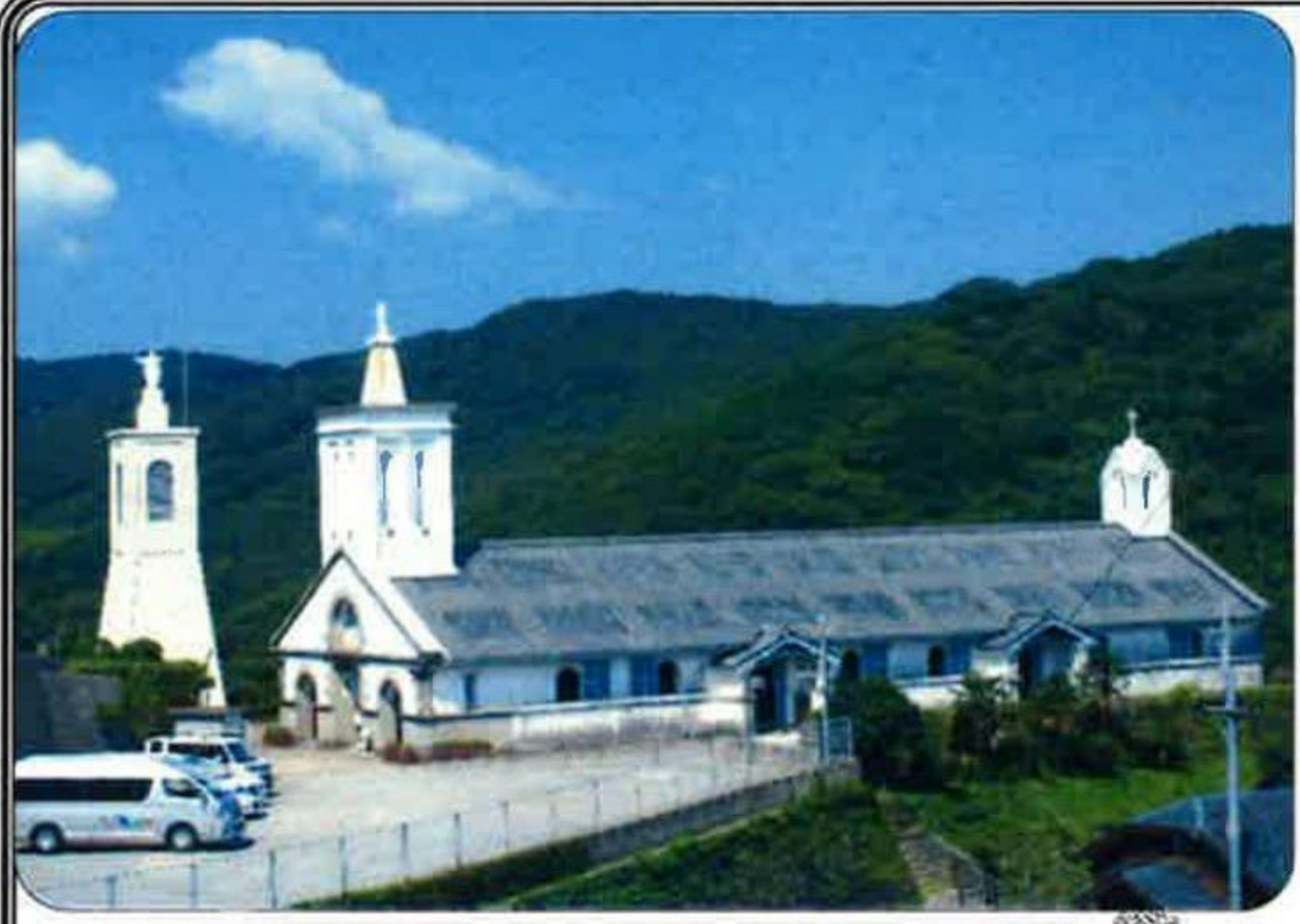
大浦天主堂での信徒発見後、宣教師と接触した大野の潜伏キリシタンはカトリックへ復帰。当初は出津集落の出津教会堂へ通っていたが、1893年にフランス人宣教師ド・ロ神父によって出津教会堂の巡回教会堂として大野教会堂が建てられた。

大野教会堂は海を見下ろす森の中にあり、大きな十字架やステンドグラスはない小さな教会である。赤土に石灰を混ぜた目地材と周辺でとれた玄武岩を用いた「ド・ロ壁」と屋根瓦の先の十字架の装飾が印象的であった。「現在、大野集落には8世帯のカトリック信者がいて、大野教会堂は海を見下ろす森の中にあり、大きな十字架やステンドグラスはない小さな教会である。赤土に石灰を混ぜた目地材と周辺でとれた玄武岩を用いた「ド・ロ壁」と屋根瓦の先の十字架の装飾が印象的であった。」



大野教会堂内部

出津集落と出津教会堂



世界文化遺産「出津集落」にある出津教会堂

出津集落の教会堂は、1885年に建てられた。1914年に、ド・ロ神父が、この教会堂を、現在の姿に改築した。教会堂の正面には、聖母マリアの像が、1910年に、ド・ロ神父が、この教会堂に、寄贈した。教会堂の内部には、ド・ロ神父が、この教会堂に、寄贈した。教会堂の外部には、ド・ロ神父が、この教会堂に、寄贈した。



出津教会堂の聖母マリア像

出津教会堂の聖母マリア像は、1910年に、ド・ロ神父が、この教会堂に、寄贈した。教会堂の内部には、ド・ロ神父が、この教会堂に、寄贈した。教会堂の外部には、ド・ロ神父が、この教会堂に、寄贈した。



出津教会堂敷地内の胸像

遠藤周作文学館



遠藤周作文学館入口

遠藤周作氏は、1923年生まれ。1996年に、遠藤周作文学館が、この教会堂に、寄贈した。教会堂の内部には、ド・ロ神父が、この教会堂に、寄贈した。教会堂の外部には、ド・ロ神父が、この教会堂に、寄贈した。



遠藤周作文学館から見える五島灘

ド・ロ神父記念館

外海地域の潜伏キリシタンを語るうえで欠かすことができない人物が、大野教会堂と出津教会堂の建築、携わったフランス人宣教師、ド・ロ神父である。

ド・ロ神父は、1868年、石版印刷技術を広めるために来日。1879年に「陸の孤島」と呼ばれるほど生活環境が厳しい外海地域に司祭として赴任した。ド・ロ神父は、産業や医療などの分野でも様々な技術を紹介し、私財を投じて外海の人達のために尽くした人物である。来日してから一度もフランスに帰ることなく、外海で生涯を終えた。1914年11月7日に亡くなったときは、葬儀に約2000名が参列したという。

ド・ロ神父にまつわる資料が展示されている。ド・ロ神父記念館の建物は、1885年、網工場として旧出津救助院の施設のひとつとして、ド・ロ神父の設計により建設されたものである。網工場の後に保育所になり、当時使われていたピアノも展示されている。他にも、ラテン語で書かれたミサの経典、ド・ロ神父が実際に使っていた祭具、数少ない直筆の手紙、土木用具など、多くの展示品を見ることが出来る。なかには医療器具もあり、

ド・ロ神父の設計により建設された網工場。後に保育所になり、当時使われていたピアノも展示されている。他にも、ラテン語で書かれたミサの経典、ド・ロ神父が実際に使っていた祭具、数少ない直筆の手紙、土木用具など、多くの展示品を見ることが出来る。なかには医療器具もあり、



記念館の展示品



記念館の展示品



記念館入口のド・ロ神父の像

当時の約15000のカルテはド・ロ神父が書いたもの。外海には当時の最先端の器具が数多くあった。一と高橋さんには教えるべきだった。現在「ド・ロさまもうめん」という特産品も販売されており、地元の小・中学校の給食にも出てくる。ド・ロ神父が、外海の人達にとつてどれだけ大きな存在であるかが見える。

大浦天主堂 「信徒発見」の舞台



世界文化遺産「大浦天主堂」

最後の取材場所は長崎市南部の大浦地区にある大浦天主堂。大浦天主堂は1864年、フランス人宣教師ブテイジャン神父によって、日本の開国に伴い長崎にできた居留地の外国人のために建てられた。キリスト教の信仰を理由に処刑された日本二十六聖人の殉教地がある西坂の方角に向けて建てられている。



大浦天主堂内部

大浦天主堂はキリスト教建築物として、日本最古で、1865年、潜伏キリシタンが宣教師と約250年ぶりに再会した「信徒発見」の舞台でもある。天主堂内にあり響いた。ガイドの犬塚さるマリア像は、信徒発見当時のものだそう。現在は、特別な日以外ミサは行われていないということだった。ださった。

取材には、1年生の新聞部員2名が参加しました。新聞社の方から新聞の作り方などを教えていただき、潜伏キリシタンについて説明を受けながら実際に取材を行いました。体験は初めてでしたが、地元長崎の世界遺産について学ぶ大変貴重な機会になりました。外海地域の2つの教会は、どちらも途中までしかバスで行くことができない場所でありました。実際に取材をして、厳しい環境の中で信仰を守り続けた潜伏キリシタンの人々の苦しい状況を感じることもできました。取材で訪れた世界文化遺産やその関連施設は、これからさらに多くの人達が訪れると予想されます。多くの人に訪れてもらうのは良いことだと思います。これらの場所は観光地ではありません。私たちが最初に教えていたように、教会は「生活の一部であり、祈りの場」です。訪れる場所や出会う人々に敬意を払い、マナーを守ることが大切だと改めて感じました。長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界文化遺産に登録された背景には、関連施設を保護してきた人々や信仰してきた人々だけでなく、きつと潜伏キリシタンの存在に気づきながらも黙認してきた仏教徒の存在もあって今があるのではないかと、共同通信社の小池真一さんの話も心に残りました。取材を感銘したド・学んだことを生かし、今後の取材活動や新聞作りにも努めたいと思っています。ありがとうございました。

編集後記

取材には、1年生の新聞部員2名が参加しました。新聞社の方から新聞の作り方などを教えていただき、潜伏キリシタンについて説明を受けながら実際に取材を行いました。体験は初めてでしたが、地元長崎の世界遺産について学ぶ大変貴重な機会になりました。外海地域の2つの教会は、どちらも途中までしかバスで行くことができない場所でありました。実際に取材をして、厳しい環境の中で信仰を守り続けた潜伏キリシタンの人々の苦しい状況を感じることもできました。取材で訪れた世界文化遺産やその関連施設は、これからさらに多くの人達が訪れると予想されます。多くの人に訪れてもらうのは良いことだと思います。これらの場所は観光地ではありません。私たちが最初に教えていたように、教会は「生活の一部であり、祈りの場」です。訪れる場所や出会う人々に敬意を払い、マナーを守ることが大切だと改めて感じました。長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界文化遺産に登録された背景には、関連施設を保護してきた人々や信仰してきた人々だけでなく、きつと潜伏キリシタンの存在に気づきながらも黙認してきた仏教徒の存在もあって今があるのではないかと、共同通信社の小池真一さんの話も心に残りました。取材を感銘したド・学んだことを生かし、今後の取材活動や新聞作りにも努めたいと思っています。ありがとうございました。